②高齢者のデジタル化

この定期連載のお題は「地域のデジタル化」であるが、第2回目にしておそらく最も関心が高く、また、難易度が高いものについて書いていく。そう「高齢者のデジタル化」である。

コロナの影響でデジタル化の関心が高まっていることは、前回この欄で書いたが、コロナ以前から「高齢者のデジタル化」は、常に社会や地域の関心事であった。日本は超高齢化社会が進んでいる国である。高齢者の人口は2019年には3588万人で総人口の28・4％であるが、2040年には3921万人で総人口の35・3％になると予測されている。日本人の3人に1人は高齢者という時代が迫ってきているのである。一方で、デジタル技術の発達は目まぐるしく、国の重点政策であるSociety5.0によって人工知能（AI）、ロボットや自動運転など、これまで以上のデジタル化による社会変革が進められようとしている。

Society5.0はきたるべき超高齢化社会に対応するための政策とも言える。例えば自動運転が可能になれば高齢になっても自動車を利用できる。また、人工知能による血圧や体重など日々の健康チェックやドローンによる薬の配達などで、家にいながら医療を受けることができる。Society5.0は超高齢化が進み、支え手になる若者が減少していく社会のなかで、まさに必須の取り組みと言えるだろう。

健康ゲーム体験会の様子。ゲームを健康促進の一環として楽しみながら、利用をする

しかし、この動きには大きな課題がある。それは「高齢者はデジタルが苦手」なことだ。そもそもスマートフォンやタブレットといったデジタル機器やインターネットを活用している高齢者は少なく、Society5.0によるデジタル技術が加速しても「使いこなせなければ意味がない」のである。

原因は何か？私は「本人の思い込み」「周りの決めつけ」が非常に大きいと考えている。80歳でゲームのプログラミングをする、90歳で動画配信をするなど、高齢者が若者顔負けにデジタルを活用し、人生を楽しんでいる事例が全国で増えてきている。要は「やればできる」のであるが、地方に行けば行くほど「高齢者は紙だから、できないから」という人が増えていく。これは高齢者自らの言葉というよりは、家族や福祉・行政関係者といった「高齢者を取り巻く言葉」であることが多い。そもそもデジタルに触れる機会を周りが奪っているから使えないし、「できない」と言われ続けた高齢者が「私にはできない」と思い込んでしまうのは当たり前なのではないだろうか？

「高齢者のデジタル化」について、デジタル機器を貸し出すことや、スマートフォンやタブレット講座を開催することなどは必要であるが、それ以上に大切なことは「高齢者だからできない」という周りの決めつけをなくす、地域や住民の価値観そのものを変えていくことではないだろうか。

【一般社団法人トナリノ】SAVE TAKATA（セーブタカタ）が前身組織。「あなたの困りごと」を一緒に解決する「地域の相棒」として、ウェブサイトやチラシなど広報物の作成、商品開発や販売など営業活動、デジタル人材の育成など幅広い活動を展開している。事務所は高田大隅のたまご村内のコワーキングスペース「ヤドカリ」。電話番号は47・3287。

執筆者
トナリノ代表理事
佐々木信秋